館蔵品でみる
浮世絵の世界 II

企画展

我が名は豊国

2026 11月3日(火・祝) ≫ 12月13日(日)



山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

周辺の絵師たち

三代豊国は嘉永5年(1852)、娘婿の三代国政に「国貞」を継がせます。二代国貞、のちの四代豊国です。豊国系は門人数が多く、幕府が倒れて明治の世になっても活動を続けた絵師がたくさん出ました。他派の絵師との交流も、合作というかたちで見られます。

19



19 げんじ今様絵巻 あふひ【安政5年(1858)】
二代国貞画(年玉枠)。画題は柳亭種彦『偐紫田舎源氏』。将軍の名代を務める足利光氏の晴れ姿を見ようと、妻の二葉の上が湯浴みや梳りに勤しむ。二葉の上は『源氏物語』の「葵の上」の見立てで、道具や着物など、随所に葵の葉が描いてある。

20



20 本朝廿四孝 十種香之場【明治26年(1893)】
歌舞伎狂言『本朝廿四孝』は近松半二・三好松洛らの合作。「十種香の場」は、死んだはずの許婚・武田勝頼(四代中村福助(成駒屋))のために香を焚く八重垣姫(五代尾上菊五郎)の前に、勝頼と瓜二つの若者簑作が現れる場面。絵師の三代国貞(香朝楼)は三代豊国・二代国貞に師事した四代国政で、梅堂・豊斎と称した。

21



21 俤源氏五十四帖 十七／絵合【元治元年(1864)】
二代国貞・二代広重の合作物。題材は『偐紫田舎源氏』で『源氏物語』54帖を擬した連作である。「立斎」号は初代・二代の広重が使用したが、初代広重は安政5年(1858)に死去しているので、本作は二代広重である。

22



22 東都高名会席尽 局岩ふじ／五代市川団蔵【嘉永5年(1852)】
局岩藤は『加賀見山再岩藤』に登場する悪女。若く誠実な中老尾上に嫉妬し、謀反をたくらむ。三代豊国が初代広重と合作した「東都高名会席尽」の一つで、バックの風景画に潮干狩りの名所・洲崎が描かれる。

初代豊国



初代豊国像（初代国貞筆、『戯作六家撰』より／早稲田大学図書館蔵）

初代豊国の本名は、倉橋熊吉。明和6年（1769）、芝神明前三島町の木彫人形師の家に生まれ、幼少期から歌川豊春に学びました。鳥居清長や喜多川歌麿の影響を受け、役者絵・芝居絵・美人画に独自の境地を開きました。

版元の和泉屋市兵衛とタッグを組み、三枚続きの舞台絵、読本や合巻の挿絵を手がけて、人気を博しました。和泉屋から出版した「役者舞台之姿絵」は評判が良く、40点以上続くヒット作となりました。

また、国貞・国政・国芳など多くの優秀な門人を育て、歌川派の主流を形成しました。門人数は40余名に及びます。

文政8年（1825）に死去し、三田の功運寺（こううんじ）に葬られました。功運寺が大正11年（1922）に上高田へ移転したため、以来、墓所はそこにあります。



1 金谷金兵へ（関三十郎）【文化7年（1810）】　羽織袴の国侍姿で立つ金谷金兵衛。この年初演の『江戸春御摂曽我』で、二段目大切（興行日最終幕の最後）に登場する役である。役者は二代関三十郎。



2 惟高親王（市ノ川市蔵）【文化7年（1810）】　惟高親王は文徳天皇の第一皇子。聡明を謳われたが、藤原良房との確執で皇位継承から外れた。本作では衣装に直線を多用してメリハリを出し、豪放さ・躍動感・威厳を表している。

功運寺　初代豊国墓所　中野区上高田



初代豊国墓石
戒名は「得妙院実彩麗亳信士」。



功運寺は曹洞宗寺院。大正11年（1922）に現在地へ移転。戦後に萬昌院と合併した。

二代豊国



「豊国先生痤筆之碑」
（Friedrich Succo著『UTAGAWA TOYOKUNI und Seine Zeit』1913-1914刊より引用）
提供：Smithsonian Libraries and Archives デジタルコレクション



文政11年（1828）8月、二代豊国（豊重）の呼び掛けで墨田区・法性寺の柳島妙見堂に建立された。碑面に初代豊国の没年は文政8年（1825）正月とあるので、その3年後のことである。表に初代豊国の事績、裏に門人の連名があり、豊重の「豊国」襲名を跡づける貴重資料である。大正12年（1923）の関東大震災で倒壊し、現在はその一部が法性寺に残るのみだが、幸いドイツ人Friedrich Succoが拓本と碑の写真を自著に収載したので、内容が現代に伝わった。

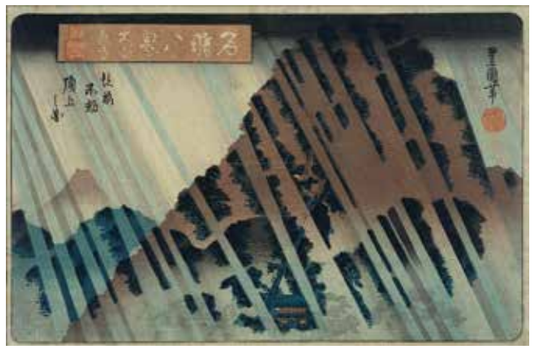
二代豊国の本姓は不詳、名は源蔵。文政の初め頃に初代豊国に入門。優秀な兄弟子が多く、二代豊国はその力量に疑問を持たれていた、とされてきたからです。しかし、本当の要因は、天保6年（1835）に34歳の若さで亡くなったことでしょう。その人物像や生き様がよく分からないのは、そのためです。

大正期から昭和初めにかけて、小島烏水・坪内逍遙・七戸吉三らが、作品の掘り起こしや技術的特徴についての研究を進めました。これにより、二代豊国の画業は再評価され、その力量を過小評価することはできない、という声が主流となりました。

国重、豊重と称しました。初代豊国の養子となり、文政8年（1825）に師が死去すると「豊国」を襲名して、二代豊国となりました。

文政11年、墨田区法性寺（ほっしょうじ）の柳島妙見堂に「豊国先生痤筆之碑」を建立。初代豊国を顕彰するため、多くの門人や後援者が、二代豊国の呼び掛けに協力しました。

二代豊国の画業は長い間、正当な評価を受けてきませんでした。



二代豊国「大山夜雨」
（「名勝八景」より／国会図書館デジタル）



二代豊国自筆「口上」
（『鶴千年対面曽我』より／国会図書館デジタル）

三代豊国

三代豊国は、初代国貞のこと。天明6年（1786）、材木問屋「亀田屋」に生まれます。本名は角田庄五郎。後に庄蔵、肖造。多くの画号を使用していて、五渡亭、香蝶楼、一雄斎、琴雷舎、北梅戸、富望庵、桃樹園、応好、月波楼、喜翁、国貞舎豊国、雛獅豊国、浮世又平、不器用又平などと号しました。

弘化元年（1844）、周囲に推されて「二代目豊国」と称しました（実際は三代）。歌川派の中でも門人数は特に多く、70余名を数えます。嘉永5年（1852）には、娘婿の三代国政に「国貞」を継がせています。

活動期間が長く、人気もあり、多くの作品を手がけました。作品数は1万点以上に及ぶとされています。役者絵・美人画に特徴があり、嘉永6年（1853）の『江戸寿那古細撰記』には「豊国にかほ（似顔）、国芳むしや（武者）、広重めいしよ（名所）」とあります。

慶応元年（1865）に死去。数え80歳。戒名は「豊国院貞匠画僊信士」。墓所は亀戸の光明寺です。



三代豊国顕彰碑
（亀戸天神社・江東区）



三代豊国像
（豊原国周筆／国会図書館デジタル）



3

3 燕人張飛／葭萌関張飛戦馬超【文化10年（1813）】

三国志の一場面。益州の劉璋は漢中の張魯を抑えようと劉備を招くが、劉備が領土への野心を露わしたため、逆に張魯へ支援を求める。張魯は客将の馬超を派遣し、馬超と張飛は「葭萌関」で激しい一騎打ちに及ぶ。



三代豊国墓石
戒名は「豊国院貞匠画僊信士」。



光明寺は天台宗寺院。
門前の石柱には「二世歌川豊国の墓」とある。

光明寺
三代豊国墓所
江東区亀戸

三代豊国「五渡亭」期

初代国貞は活動初期から、「五渡亭」「一雄斎」の号を用いました。特に「五渡亭」は大田南畝に付けてもらったといい、本人も愛着を持っていたようです。享和初年頃から天保末年頃まで、長きにわたり使用しました。

4



4 待賢門源平合戦ノ図【文化12年（1815）か】

平治の乱（1159年）に続く六波羅合戦の前哨戦。待賢門に陣取る平重盛軍と、源義朝・義平軍が対峙。義平は重盛に「組もう、組もう」と一騎打ちを望むが、重盛は逃げ回る。最終的には平氏軍が、源氏軍を門外まで撃退する。

5



6



5 大星由良之助／五代市川団蔵【天保4年（1833）】

『仮名手本忠臣蔵』十段目「天川屋見世」の場。由良之助が長持から姿を現し、天川屋義平を試した、と詫びる。天保4年（1833）8月の市村座では、由良之助／五代市川団蔵、儀平／五代市川海老蔵、儀平女房おその／三代尾上菊五郎の配役だった。

6 鉄ヶ嶽陀左衛門／二代市川九蔵【文化6-文政10年（1809-27）】

画題は『関取千両幟』。ひいきの若旦那のため八百長を強いられる力士岩川（猪名川）の悲劇と友情を描く。鉄ヶ嶽陀右衛門は遊女錦木をめぐって鶴屋の礼三郎と争い、斬られる関取である。

7



8



7 仕初式／八代市川団十郎・三代尾上栄三郎【天保4-11年（1833-40）か】

年明けの芝居始め。団十郎が少年姿なので天保4～11年あたりか。団十郎の「にらみ」には邪気払いの力があるという。八代団十郎は江戸歌舞伎のホープだったが、父・五代市川海老蔵（七代団十郎）の舞台に招かれた大坂で、謎の自殺を遂げた。

8 小林朝ひ奈／七代片岡仁左衛門【文政9年（1826）】

小林朝比奈（朝比奈三郎）は、歌舞伎狂言『寿曾我対面』の役柄の一つ。曾我兄弟の仇討ちの協力者で、工藤祐経を見て「父の敵」とはやる兄弟をなだめ、時機を諮るよう諭す重要な役割である。

三代豊国「香蝶楼」期

初代国貞は英一蝶の画風に惹かれ、文政10年（1827）頃から「香蝶楼」の号を用いるようになりますが、続き物を描く際には「五渡亭」と併用することもありました。弘化元年（1844）に「豊国」を襲名した後は専ら、「香蝶楼」を使うようになります。



9

9 武蔵乃名所調布多摩川【弘化元年（1844）】
多摩川の晒し布は特産品で、貢納された。『万葉集』に「多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき」とある。「国貞改二代豊国画」とあるが、実際は三代豊国である。版元名「江崎屋」がない別摺もある。



10

10 仮名手本忠臣蔵 三段目【天保元年（1830）か】
塩冶判官が高師直に斬りつけるが、討ち損じてしまう。邸外では供侍の早野勘平が腰元お軽と逢引き中で、主人の大事に遅れを取る。切腹しようとしたところをお軽に諭され、お軽の郷里の山崎へ逃げる。



11

11 七月【天保７年（1836）】
足下に男児が纏わりつき、思わず微笑む美人。着物の裾に透ける男児の顔が一瞬の清涼感を演出する。母子か歳の離れた姉弟かは分からないが、慈愛に満ちた美人の表情が印象的。「江戸名所百人美女」にほぼ同じ絵柄のものがある。



12

12 出雲屋お国／四代尾上梅幸【弘化３年（1846）以降】
四代尾上梅幸は大坂生まれ。天保２年（1831）、三代尾上菊五郎の娘婿になり、三代尾上栄三郎として江戸・市村座の舞台に。弘化３年（1846）に尾上梅幸を襲名。最後は四代尾上菊五郎となった。



13

13 新吉原江戸町二丁目久喜万字屋内 雲井【安政３年（1856）か】
久喜万字屋（久喜楼）は新吉原の大店で、浅草寺裏の日本堤（現台東区千束）にあった。「雲井」は高尾、薄雲、奥州、勝山、濃紫、常盤、玉菊と並び、高名をはせた遊女。いわゆる花魁の地位に至るには知性も教養も必要だった。

三代豊国「豊国」襲名後

初代国貞の名声は師の初代豊国を超えた、といわれますが、天保改革時には仕事が激減し、生計を立てるのに苦労したようです。弘化元年（1844）秋、「豊国襲名」の書画会を開催しますが、その際「自分は二代目」と吹聴して物議を醸しました。この時期には、「豊国」襲名者が用いる「一陽斎」号の作品も見られます。



14

14 梅柳魁双紙 五立目大詰【安政元年（1854）】
伐り倒された梛の木・柳の木夫婦が、平太郎・お柳という人間となり再会を果たす場面。「横曽根平太郎」は八代市川団十郎、「言号卯の木」は二代中村富十郎。「五立目大詰」は最終幕のことで、物語のクライマックスや見せ場が演じられる。



15

15 擬五行尽之内 孝の恵に身も肥る 土 慈悲蔵／三代嵐璃寛【嘉永５年（1852）】
「俳優似顔東錦絵」のうち。百姓慈悲蔵は『本朝廿四孝』に登場。山本勘助の後家・越路の子だが、兄・横蔵ばかり甘やかす母に冷遇されても、ひたすら母を思い続ける。上杉家に仕える直江兼続である。



16

16 お目見得口上／五代市川海老蔵【安政５年（1858）】
天保３年（1832）、七代市川団十郎は子の六代海老蔵に八代団十郎を継がせ、自分は五代海老蔵と名乗る。天保改革で追放処分を受け上方に移ったが、この年７月、久々に江戸の舞台に立った。その口上絵。



17

17 舎人松王丸／四代中村歌右衛門【文久２年（1862）】
三代豊国78歳の作。舎人松王丸は『菅原伝授手習鑑』の登場人物で、実子の小太郎を犠牲にしてまで菅丞相に尽くす。この大首絵シリーズは神田塗師町の銅鉄商・紀伊国屋（三谷家）がスポンサーで、豊国書簡などが残っている。



18

18 濡髪長五郎／八代市川団十郎【嘉永５年（1852）】
まわしを肩に担ぐ濡髪長五郎。大坂相撲の人気力士だったが、人助けで侍を殺し、逃亡の果てに、母に逢うため親里に現れる。八代市川団十郎は面長の美貌で人気を博し、若くして江戸歌舞伎を担ったが、絶頂期の32歳で自殺した。